

二〇二六年度一般選抜入学試験問題

国語

一般選抜入学試験(A日程)

二月十日

時間 十四時五十分～十六時十分(八十分)

注意事項

- 一、問題は問題一から問題三(A)(B)まであります。(一頁～二十二頁)
- 二、問題三は、選択問題です。(A)か(B)のいずれかを選択して下さい。ただし、日本語・日本文学科の受験者(専願・併願)は(B)を選択してください。
- 三、座席番号・受験番号は、解答用紙の所定の欄に記入してください。
- 四、解答はすべて解答用紙の指定された箇所に記入してください。
- 五、試験終了まで退室できません。

問題一

次の文章は、太宰治「黄金風景」(一九三九年)の全文です。よく読んで、後の問に答えなさい。なお、本文中、今日の人権感覚に照らして不適切と思われる語句や表現がありますが、当時の時代背景を考慮して原文通りとしました。

私は子供のときには、余り質のいい方ではなかった。女中をいじめた。私は、のろくさいことは嫌いで、それゆえ、¹のろくさい女中を殊にもいじめた。お慶は、のろくさい女中である。林檎の皮をむかせても、むきながら何を考えているのか、二度も三度も手を休めて、おい、とその度毎にきびしく声を掛けてやらないと、片手に林檎、片手にナイフを持ったまま、いつまでもぼんやりしているのだ。足りないのではないかと、思われた。台所で、何もせずに、ただのっそりつつ立っている姿を、私はよく見かけたものであるが、子供心にも、うすみつともなく、妙に痒にさわって、おい、お慶、日は短いのだぞ、などと大人びた、いま思っても脊筋の寒くなるような(X)の言葉を投げつけて、それで足りずに一度はお慶をよびつけ、私の絵本の観兵式の何百人となくうようよしている兵隊、馬に乗っている者もあり、朝から昼飯も食わず日暮頃までかかって、やつと三十人くらい、それも大将の鬘を片方切り落したり、銃持つ兵隊の手を、熊の手みたいに恐ろしく大きく切り放したり、そうしていちいち私に怒鳴られ、夏のごころであった、お慶は汗かきなので、切り抜かれた兵隊たちはみんな、お慶の手の汗で、びしょびしょ濡れて、私は遂に痲痺をおこし、お慶を蹴った。たしかに肩を蹴った筈なのに、お慶は右の頬をおさえ、がばと泣き伏し、泣き泣きいった。²「親にさえ顔を踏まれたことはない。一生おぼえておきます」うめくような口調で、ときれ、ときれういっただので、私は、流石にいやな気がした。そのほかにも、私はほとんどそれが天命でもあるかのように、お慶をいびった。いまでも、多少はそうであるが、私には無智な魯鈍の者は、とても堪忍できぬのだ。

一昨年、私は家を追われ、一夜のうちに窮迫し、巷をさまよひ、諸所に泣きつき、その日その日のいのち繋ぎ、やや文筆でもって、自活できるあてがつきはじめたと思つたとたん、病を得た。ひとびとの情で一夏、千葉県船橋町、³ド口の海のすぐ近くに小さい家を借り、自炊の保養をすることができ、毎夜毎夜、寝巻をしぼる程の寝汗とたたかい、それでも仕事はしなければならず、毎朝毎朝のつめたい一合の牛乳だけが、ただそれだけが、奇妙に生きているよろこびとして感じられ、庭の隅の夾竹桃の花が咲いたのを、めらめら火が燃えているようにしか感じられなかつたほど、私の頭もほとほと痛み疲れていた。

そのころのこと、戸籍調べの四十に近い、瘦せて小柄のお巡りが玄關で、帳簿の私の名前と、それから無精髯のばし放題の私の顔とを、つくづく見比べ、おや、あなたは……のお坊ちゃんじゃございませんか？ そう言うお巡りのことばには、強い故郷の訛があつたので、

「そうです」私はふてぶてしく答えた。「あなたは？」

お巡りは瘦せた顔にくるしいばかりにいつぱいの笑をたたえて、

「やあ、やはりそうでしたか。お忘れかも知れないけれど、かれこれ二十年ちかくまえ、私はKで馬車やをしていました」

Kとは、私の生れた村の名前である。

「こらんの通り」私は、にこりともせずに応じた。「私も、いまは落ちぶれました」

「とんでもない」お巡りは、なおも笑しげに笑いながら、「小説をお書きなさるんだつたら、それはなかなか出世です」

私は苦笑した。

「とごころで」とお巡りは少し声をひくめ、「お慶がいつもあなたのお噂をしています」

「おけい？」すぐには呑みこめなかつた。

「お慶ですよ。お忘れでしょう。お宅の女中をしていた」

思い出した。ああ、と思わずうめいて、私は玄關の式台にしゃがんだまま、頭をたれて、その二十年まえ、のろくさかつたひとりの女中に対しての私の悪行が、ひとつひとつ、はつきり思い出され、ほとんど座に耐えかねた。

「幸福ですか？」ふと顔をあげてそんな突拍子ない質問を発する私のかおは、たしかに罪人、被告、ヒクツツな笑いをさええ浮べていたと記憶する。

「ええ、もう、どうやら」くつつたなく、そうほがらかに答えて、お巡りはハンケチで額の汗をぬぐって、「かまいませんで

しようか。こんどあれを連れて、いちどゆっくりお礼にあげましょう」

私は飛び上るほど、ぎよっとした。いいえ、もう、それには、とはげしく拒否して、私は言い知れぬ屈辱感に身悶えしていた。

けれども、お巡りは、朗かだった。

「子供がねえ、あなた、この駅につとめるようになりましてな、それが長男です。それから男、女、女、その末のが八つでことし小学校にあげりました。もう「安心、お慶も苦労いたしました。なんというか、まあ、お宅のような大家族にあげてギョウギ見習いした者は、やはりどこか、ちがひしてな」すこし顔を赤くして笑い、「おかげさまでした。お慶も、あなたのお噂、しじゅうして居ります。こんどの公休には、きつと一緒にお礼にあげります」急に真面目な顔になって、「それじゃ、きょうは失礼いたします。お大事に」

それから、三日たつて、私が仕事のことよりも、金銭のことで思い悩み、うちじじとして居れなくて、竹のステッキ持って、海へ出ようと、玄関の戸をがらあげたら、外に三人、浴衣を着た父と母と、赤い洋服着た女の子と、絵のように美しく並んで立っていた。お慶の家族である。

私は自分でも意外なほどの、おそろしく大きな怒声を発した。

「来たのですか。きょう、私これから用事があつて出かねければなりません。お気の毒ですが、またの日にお願い下さい」

お慶は、品のいい中年の奥さんになっていた。八つの子は、女中のころのお慶によく似た顔をしていて、うすのろらしい濁った眼でぼんやり私を見上げていた。私はかななく、お慶がまだひとことも言い出さぬうち、逃げるように、海浜へ飛び出した。竹のステッキで、海浜の雑草を薙ぎ払い難き払い、いちどもあとを振りかえらず、一歩、一歩、地団駄踏むような荒んだ歩きかたで、とにかく海岸伝いに町の方へ、まっすぐに歩いた。私は町で何をしていたらう。ただ意味もなく、活動小屋の絵看板見あげたり、呉服屋の飾窓を見つめたり、ちえつちえつと舌打ちしては、心のどこかの隅で、負けた、負けた、と囁く声が聞えて、これはならぬと烈しくからだをゆすぶっては、また歩き、三十分ほどそうしていたらうか、私はふたたび私の家へとつて返した。

うみぎしに出て、私は立止つた。見よ、前方に平和の図がある。お慶親子三人、のどかに海に石の投げっこしては笑い興じている。声がかまで聞えて来る。

「なかなか」お巡りは、うんと力こめて石をほうつて、「頭よきそうな方じゃないか。あのひとは、いまにエラくなるぞ」

「そうですとも、そうですとも」お慶の誇らしげな高い声である。「あのかたは、お小さいときからひとり変つて居られた。目下のものにもそれは親切に、目をかけて下さつた」

私は立ったまま泣いていた。けわしい興奮が、涙で、まるで気持よく溶け去つてしまふのだ。

7 負けた。これは、いいことだ。そうなければ、いけないのだ。かれらの勝利は、また私のあすの出発にも、光を与える。

(太平治「黄金風景」)

注

*観兵式……旧軍隊で行われた陸軍礼式の一つ。

*大家……金持ち、または身分の高い家柄

*活動小屋……活動写真を客に見せる常設の建物、映画館の旧称。

問一 波線部 a s e を、漢字で書きなさい。

問二 傍線部 1「のろくさい女中」を別の語句で言い表した表現を、本文から七字で書き抜きなさい。

問三 空欄 X を補うのに最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 融和 イ 悲哀 ウ 歎息 エ 痛苦 オ 非道

問四 傍線部 2「親にさえ顔を踏まれたことはない。一生おぼえております」から、「私」はお慶のどのような気持ちを感じ

取ったか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分を強く叱りつける「私」を恐れる気持ち。
イ 自分に暴力を振るう「私」の将来を心配する気持ち。
ウ 「私」の言う通りにできない自分を情けなく思う気持ち。
エ 自分をいじめる「私」を強く恨む気持ち。
オ 「私」の要求が過大なことに對し不満に思う気持ち。

問五 傍線部 3「私はふてぶてしく答えた」のはなぜか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 故郷から遠く離れた地で遭遇したお巡りが、偶然にも自分を知っていたことに驚いたから。
イ 故郷における自分の恵まれた境遇を知る人は、今の自分の窮状を見下すと思つたから。
ウ 現在の生活があまりに困窮しているために、故郷の人と昔話をする暇はなかつたから。
エ 相手は自分を知っているようだが、自分は相手を知らないために不信感を抱いたから。
オ いくら病氣とはいへ、無精髻をのばし放題の自分のだらしなさにきまりが悪かつたから。

問六 傍線部 4「屈辱感」を「私」が抱いたのはなぜか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 後日、妻であるお慶を連れて「私」を再び訪ねると言うお巡りに對し、図々しさを感じたから。
イ 自分には安定した収入がないが、相手は警察官で安定した収入があることがうらやましかつたから。
ウ かつて自分が酷い扱いをした女中に、今の落ちぶれた姿を見られることが恥ずかしかつたから。
エ かつて自分よりも目下だつた女中が、現在は自分よりも出世したことが悔しかつたから。
オ 現在は幸福に暮らしているお慶と、不幸のどん底にある自分とを比較してひがんだから。

問七 傍線部 5「やはりどこか、ちがひしてな」が意味することとして、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア お慶は一般的な女性と異なり、礼儀作法が身につけていて良い妻であるということ。
イ お慶はかつて「私」にいじめられたため、一般的な女性よりもおどおどしているということ。
ウ お慶は「私」の実家で女中をしていたため、警察官の妻としては至らない点が多いということ。
エ お慶は「私」の実家で女中をしていたため、生涯に渡って苦勞することになったということ。
オ お慶は裕福な家で女中をしていたため、長男を立派に育て上げたということ。

問八 傍線部 6「負けた、負けた」と傍線部 7「負けた」の「私」の心情にはどのような違いがあるか。五〇字以内で説明しなさい。

問題二 一次の文章をよく読んで、後の問に答えなさい。なお、設問の都合上、省略した箇所があります。

西洋の哲学が日本の近代社会に足場をもつようになるには、文学の場合とは比べものにならないほどの困難があった。西洋の哲学は日本の社会に、結局根付かなかったと言ひとまでいかもれない。西洋の哲学が近代日本で経験したこうした困難にはいくつかの理由があるが、哲学のための十分な言語を作り出すことのむずかしさが、そのひとつであったことは疑いない。

哲学は、ある程度一般的で抽象的な概念を必要とする。西洋哲学がもたらされるまで日本語にそうした概念を表す言葉がなかったわけではない。儒教および仏教の伝統には、そうした言葉と概念が存在した。これは主として、漢字の組み合わせによって表される、中国から渡ってきた言葉と概念であり、それゆえ、普通の人々の話す日常の言葉とは区別される特殊な語彙^①を形成していた。明治維新の直前に西洋の哲学が日本に入ってきたとき、儒教や仏教の伝統に属する語彙とは別の、しかし、同様に特殊な語彙が、ごく短期間のあいだに作られた。しかも、その際、儒教や仏教に由来する語が転用されることもしばしば生じた。

哲学のための新しい用語をもつことで、われわれは自身の言語で、西洋に由来する哲学的問題や主張を議論できるようにした。このことによる恩恵は過小評価されるべきではない。しかしながら、近代の先人たちから受け継いだ、こうした哲学の言葉は、多くの弊害ももたらした。それには少なくとも三つの理由がある。

第一に、哲学用語はたいていきわめて抽象的であるから、その意味の説明には、具体的な場面でそれがどのように使われるかを示してやる必要がある。自然科学の用語の多くも、哲学用語が作られるのと同じ時期に作られた。また、そのなかには一般的で抽象的なものもある。しかしながら、科学においては、一般的で抽象的な用語の意味を正確に特徴づけることに、それほど困難はない。残念ながら、哲学においてはそうではなかった。新しい哲学用語の多くは、詳細な説明を欠いたまま、西洋の言葉を翻訳する語として日本語に導入された。

第二に、先に述べたように、新しい哲学用語のなかには、仏教や儒教の伝統から借りて来た言葉に、新しい意味が無理やりおしつけられたものも多かった。ここから混乱が生じてもおかしくない。(A)、「自然」という語は、「nature」や「natu」といった語の訳語として採用されたものであるが、これはまた中国哲学では道教の背景をもつ語でもあった。この二つの意味を混同しないようにすることはほとんど不可能であったために、多くの混乱やナセンスが生み出される結果になった。

第三に、少なくともごく最近まで、哲学用語の多くは、日常の会話で用いられる言葉とは異質のものであった。それは、翻訳語として、日常の会話に使われるならば落ち着きを欠いた。むずかしい漢字を用いることもあずかつて、哲学用語は、一般人の日常の言葉からかけ離れたものである。

最大の問題は、こうした哲学用語が、日本語の一部として確立してから出てきた。まがりなりにも日本語の一部となつたという事は、ひとつが、その正確な意味に思いわずらわなくとも使うことができるということである。実際、ひとは自分の用いている言葉の意味を正確に理解して用いているのではない。自身の言語の一部であるという理由だけで、言葉にはその意味がついてくるひとつは考える。哲学用語についても同じである。(B)、「ひとは、正確な意味どころか、漠然とした意味の了解も伴わずに、哲学用語を使うようになる。その結果は、理解の錯覚の蔓延^③である。

この錯覚は、たとえば次のような仕方^④で生じる。カントを真剣に研究したいという学生ならば、カントのテキストをもとのドイツ語で読むだろう。しかし、よほどドイツ語に堪能でない限り、カントの文章の理解には日本語の助けが必要になる。それはいったん日本語に「翻訳」されて理解されることになる。カントが用いているドイツ語の言葉が、その訳語とされる日本語の言葉で置き換えられることによって、カントが言っていることを理解したような錯覚が容易に生まれる。

現在から振り返るならば、日本で哲学言語がいちおうの成熟をみたのは一九六〇年代のことだったと言える。それは、日本人が西洋哲学を取り入れ始めてから百年後のことである。この時期、日本の哲学者の大多数はまだ、以前通りの仕方^⑤で哲学について語ったり、書いたりしていたが、何人かの哲学者は、これまでとは異なるやり方で、哲学用語に向き合おうとして出していた。

先に述べたように、哲学用語の大部分はヨーロッパの言葉の訳語として始まった。もとの言葉を知っている者にとっては、自分がこうした訳語を、その原語と同じ意味で用いていると信じるのはたやすいことだった。こうした者は、日本語の哲学用語の

意味を定義したり特徴づけたりする必要を感じなかっただろう。(C)、「もとのヨーロッパの言葉を示すことで足りると考えただけである。しかし、もとの言葉が何を意味するのは、ごくぼんやりとした把握しかもたないことになる。十分にある。その場合当然、日本語の哲学用語の意味についても、ぼんやりとした把握しかもたないことになる。その結果頻りに起こることは、ひとつが、哲学的な主題について流暢に語ったり書いたりするにもかわらず、自分が何について語り書いているのかわかっている人々のあいだで哲学の議論がスムーズに進行しているとみえながら、実際のところ生じているのは、何の理解も伴わない言葉のやり取りだけといった事態である。

こうした状況に対抗して、自分の責任で哲学用語を使おうとする若い世代の哲学者が出てきた。こうした哲学者たちは、自分が哲学の言葉をどのように使つつもりかを、翻訳語のものになった西洋の言葉に訴えることなく、意識的に特徴づけようと努めた。それと同時に、日常の言葉からそれほどかけ離れていない言葉で哲学の議論を行おうとした。

前の世代から受け継いだ哲学言語を、日本の哲学者が意識的に作り直そうとして始めてから、だいたい半世紀経った。一般に、哲学にかかわる人々のあいだで、表現が明瞭であることは、すぐれた哲学の文章であるために必要だと認められている。そして、現在われわれは、自分たちの用途に十分であるような哲学の言語を所有している。

※こうした展開が生じたのが、哲学の国際化と国際共通語としての英語の独占的地位の確立と、ほぼ時期を同じくしたという事は、大きな皮肉である。

最近生じた哲学の国際化は、哲学がより広範囲の地域のより多くの人々にとって重要となったから生じたことでは決してない。哲学がよりポピュラーになったというのではなく、その反対に、哲学が高度に専門化したことがむしろ哲学の国際化を推進してきたのである。

哲学における専門化は、専門家どうしの国際的な意見交換のための共通言語として英語を採用することを伴っている。これは、自然科学の多くの分野で生じたのと同じことである。いまや哲学においてさえ、哲学の特定の主題に関して独創的な貢献を

したいと思うならば、英語で発表しなければならないという状況になっている。

現在見られるような専門化にまつた何の利点もないわけではない。哲学の問題のなかには、その解決のために、それに専念する人々からの集中的な努力を必要とするものもある。そして、それは、科学哲学や哲学的論理学といった専門的な分野だけに限らない。

しかしながら、そうした問題が哲学のすべてではない。哲学はいつも専門家だけのものではなかったわけではない。重要な意味で、それは、すべての人のためのものである。哲学のなかのものもとても重要な問題は同時に、何世紀にもわたって満足な解決を見出せないでいる、もつともむずかしい問題でもあるが、それは、世界のなかでの自分の位置について考えようとするひとならば必ず関心をもつような問題でもある。

何かを選択したり、行うとき、われわれは自由にそうしているのか。時間は実在するか。すべてがそのうちになくなるのならば、人生の意味はあるのか。

こうした問いは、哲学の教育を何ら受けていない人であっても、ときには気になる問いである。こうした問いに真剣に取り組み、それがどんな内容を持ち、誰をも満足させるような答えを与えるのがむずかしいのはなぜかを、普通の人々にわかるような平易な言葉で説明するのは、哲学者の仕事である。

専門家のための哲学だけならば、哲学の言語として、英語以外の言語は必要ないかもしれない。(D)、「哲学は専門家のためだけのものではないゆえに、日本語を母語とするひとのためには、日本語の哲学言語がなくてはならない。したがって、われわれ自身の哲学言語を維持し改良することは、日本の哲学者のつとめだろう。

*ナセンス……意味がなく、ばかっていること。
*カント……イマヌエル・カント(一七二四〜一八〇四)。ドイツの哲学者。

(飯田隆「分析哲学 これからとこれまで」)

問一 傍線部①～⑤の読みを、平仮名で書きなさい。

問二 空欄 A、D を補うのに最も適切なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア それゆえ イ なぜならば ウ いずれにせよ エ たえば オ しかし

問三 傍線部 1 「困難」の具体的な内容を、本文から二五字以内で書き抜きなさい。

問四 傍線部 2 「これまでとは異なるやり方」の具体的な内容を表した段落を本文から探し、はじめの五字を書き抜きなさい。

問五 傍線部 3 「大きな皮肉」とあるが、筆者はどのようなことを「皮肉」と述べているのか。六〇字以内で説明しなさい。

問六 傍線部 4 「ある重要な意味」が指す内容として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 哲学者が重要性を認めるような問いは、解決のために、幅広い人々による公開的な議論が必要であるということ。

イ ある一連の哲学的な問いは、過去には解決できなかったものであり、今後とも考え続けなければならないということ。

ウ 世界や人生の本質に関わる哲学の問題は、専門化された哲学に従事する人には、決して解けないということ。

エ 最優先で解決すべき哲学的な課題は、一見単純だが、誰もが満足する答えを出すのがきわめて難しいということ。

オ 哲学の最重要なテーマは、あらゆる立場の人にとって、問うきっかけが訪れる可能性があるものだということ。

問七 傍線部 5 「われわれ自身の哲学言語」を形作るのにふさわしいのは、どのような言葉か。本文中の [※] より後から五字で書き抜きなさい。

問八 本文の内容に合うものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一九六〇年代以前の日本では、日本語の哲学用語があいまいであったために、カントを研究することはまったくできなかった。

イ 哲学の議論は日常的な言葉で行わなければならないので、抽象的な用語の使用は、意味を正確に特徴づけられる科学に限るべきだ。

ウ 日本語の哲学用語を用いて議論できるということは、日本人どうして、常に意味のある哲学的議論ができることを意味する。

エ 海外からもたらされた哲学的主題を議論するとき、日本人は、哲学用語の正確な意味を理解せずに使ってしまう危険がある。

オ 哲学を専門家だけのものにしなすためには、日本の哲学者によって、国際共通語としての英語の独占的優位を解消する必要がある。

問題三 (A) 次の文章をよく読んで、後の問に答えなさい。

筆者は心理療法家として、現代に生きる悩みを持った人たちとお会いする。その解決にあたって、悩みと正面から向き合い、共にその過程を歩き続ける。その際に、男性・女性という軸は、ものごとを考えるための極めて重要なことのひとつとなる。人間は人間として生まれてくるのだが、そのためには、男か女かいずれかの性を選ばねばならない。そのいずれも両方を持つことは許されない。そして、実のところ、それは「選ぶ」のではなく、好むと好まざるとにかかわらず、人間は本人の意志と関係なく男か女に決定づけられているのである。

男として、女として生まれた時から決定づけられてきた人間が、「異性」に対して抗し難い魅力を感じるということは、考えてみると不思議なことである。同性の方がはるかに理解しやすく、異性のことなど本当にわかるはずはないと思われるのだが、相互の牽引力は測り知れない。言うなれば、[X] もっとも、若い恋人たちが、「われわれは互いによく理解し合っている」などと言ったりするが、その「理解」がどれほど底の浅いものであるかは、すぐにわかるものである。ともかく、男女は抗し難い力で惹かれ、そこに [Y] 信頼と裏切り、喜びと悲しみ、人間のすべての感情が流れ、ドラマが展開する。

男女について考えるとき、男女の結合によって子どもが生まれることも忘れてはならない。この点について、現代の生物学研究の最先端の立場から、性衝動が「種」にかかわるものであつて、個性に由来するものと考えるべきではない、という主張がなされている事実は注目に値する。男女の愛は極めて個別的ではあるが、そこにはたらく性には「種」の重みがずつりとかかっているのである。人間がもっとも個性的な個と個の関係と想っているところに、「種」的な力がはたらいている。性ということはあるいがけぬ深さをもつて、人間の生き方にかかわってくるのである。

[A] 男女という軸は、人間が生きてゆく上で決して無視することのできない主要な判断軸となるのであるが、以上の点について、もう少しつっこんで考えてみる必要があると思われる。

人間の意識というものが分化してゆく過程において、混沌のなから意識が生じるには、まず「分ける」ということが行なわれねばならない。天と地、光と闇、などの分離を世界創造のはじまりとして語る神話が多いのもうなずけるのである。これに続いていろいろと分離や分割が行なわれるのであるが、そのような分化したものを統合してゆくためには、ある基本的な分割が、強力なものとして全体に及ぼされることになる。たとえば、人間の行為はさまざまあるが、それらを善と悪に分けることによって、ひとつの全体的把握ができる。あるいは、善・悪という軸が重要な判断軸となると言つてよい。

このような軸として、男・女が用いられる文化は、世界のなかにも数多くある。既に述べたように、他ならぬ人間存在そのものが男と女に分けられているので、それを基として世界のいろいろなもの、この軸によって整理してみる。男・女がそのような軸として作用しはじめると、それは人間としての男・女が個人としてどのように生きるかということに関係なく、たとえば、勇気は男、優しさは女というような観念的な分類ができてくることになる。これが判断軸として使用されるためには、そこに混乱が生じては困るので、分類は明確で一義的になってくる。

オーストラリアのアボリジニにとっては、人であろうと、ものであろうと、ドウワとイリチャという二つの分類項目のいずれかに分類されてしまう。そうして、イリチャ同士、ドウワ同士は結婚できないなどの規則がそこに存在していて、ひとつの秩序が構成されるようになっていくという。アボリジニの世界では夢と現実との区別がなく、それらは同等のものとして扱われているので、まったく混沌とした意識状態のように感じられるが、そのなかで、ドウワとイリチャという軸が、秩序を保つための重要な判断軸として存在しているわけである。しかし、そのために、[B] 日本人が二人で彼らのところに住みつくとき、一方はイリチャ他方はドウワとして決められると、その後の彼らの行動はそれなりの異なる制約を受け、「同じ日本人なのに」などと一言でも通用しないし、そのタブーを破ると、そこで生きてゆくことはできないのである。

このようなことを聞くと、何だか随分と不便な感じを受けるのだが、これと同様のことは、人間である限り、それぞれの文化に従ってやってきたことなのである。男・女の軸というのは、既に述べたように非常に重要な判断軸となることが多いので、多くの文化のなかで用いられ、それに従って、男は……すべきである、あるいは、すべきでないとか、女は……すべきである、あるいは、すべきでない、ということが厳密に決められてくる。ここで重要なことは、一人の人間として男は何ができるか、女は

何ができるか、ということではなく、重要な判断のボールとしての男・女ということが、メタファーとしての意味を帯びて、その在り方が決定されてくる、ということである。

このことは、われわれが子どものときに、「男らしい」とか「女らしい」とかの固定した観念によって、相当に行動を縛られていたことを思い出すとよくわかるであろう。現在においては、男女同権、自由、の思想によってそれらの束縛は相当に破られてきた。人間は自由を求めて生きていくし、人間の歴史の発展をそのような観点から見ることができようであろう。ここでよく認識しておかねばならぬことは、一見馬鹿げて見える固定的な分類も（たとえば、アポリジニのドウワとイリチャのような、人間が生きてゆくために必要なことだということである。メタファーとしての男女を壊してゆくときも、そのあたりのことをよく考えていないと、一挙に混沌のなかに吸いこまれるような危険を犯すことになる。自由を求めるものは、自由の獲得のために自分の失うものごとをよく自覚し、それを補償する手段をよく考えていないと、極めて破壊的な結果を得ることになってしまうのである。

現代に生きる個人としてのわれわれは、既成の秩序を一度、心のなかで解体してみ、その後自分の個性やそれを取りまく環境のからみなかで再秩序化を試みる必要がある。そんな面倒なことをせずとも、従来からある秩序のなかに自分を入れこんでゆけばいいと言えるし、そのような人が沢山いることも事実である。しかし、なかには先に述べたような面倒なことをするべく運命づけられている人が居て、われわれ心理療法家のもとに來られる人は、大なり小なりそのような課題を背負っている人と言うことができるであろう。そこで、心理療法家はその人が自分の個性に従いつつ、前述の作業をされるのを助けるのであるが、そのためには、自分自身も同様のことを試みたり、参考になりそうなパターンもよく知っていないと行かない。

男―女の軸の「Z」と再構成という点から言えば、「とりかへばや」はまことにびつたりの話である。男女の役割が現在よりはるかに固定的に考えられていた時代を舞台として、男女の取りかえを主題とした物語が語られるのだから、その細部についてよく検討してみることが、現代人のわれわれにとつても大いに意味のあるところではなからうか。「D」これを日本中世における奇異な話として、単なる好奇心をもつて読むのではなく、現代に生きるという点において、示唆を与えてくれるものとして読むわけである。

(河合隼雄「とりかへばや、男と女」)

*『とりかへばや』……平安時代末期成立の物語。権大納言家の異腹の男女のきょうだい性が性差を造って育てられる。

問一 空欄A、Dを補うのに最も適切なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A または イ つまり ウ しかし エ このように オ たとえば

問二 空欄Xを補うのに最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- A 魅力的だと思ふことは理解することによって影響されることなのであろう
- イ 魅力を感じることを理解することは同じくらい重要なことなのであろう
- ウ 魅力などというものは理解ということとは関係のないことなのであろう
- エ 魅力を感じることは理解することとは及ばないのであろう
- オ 魅力的であるということは理解できるということを上回るものであろう

問三 空欄Yを補うのに最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

A 恋愛 イ 愛情 ウ 苦楽 エ 性欲 オ 愛憎

問四 傍線部1「男として、女として生まれた時から決定づけられてきた人間が、「異性」に対して抗し難い魅力を感じる」理由を、本文中の言葉を用いて二〇字程度で説明しなさい。

問五 傍線部2「混沌のなから意識が生じるには、まず「分ける」ということが行われねばならない」とあるが、「分ける」結果、生じることとして「あてはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。」

- A アポリジニと暮らす日本人の行動が制約を受ける。
- イ 人間の個人としての多様な生き方が可能になる。
- ウ 捉えどころのない自然界のあらゆる事象を整理できる。
- エ 人間が生きてゆく上で必要となる主要な判断軸を得られる。
- オ 人間のさまざまな行為について全体的な把握ができる。

問六 傍線部3「男らしい」とか「女らしい」とかの固定した観念」を具体的に表した箇所を本文から一〇字以内で書き抜きなさい(句読点を含む)。

問七 空欄Zを補う語を本文から書き抜きなさい。

問八 本文の趣旨に合うものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- A 心理療法家は既成の秩序のなかに自分を入れこまずに悩む患者に対し、その患者の個性を大事にしつつ秩序に合わせ行動ができるように助けるべきだ。
- イ 男女同権や自由の思想によって、現在では男らしさや女らしさの束縛は相当に破られているが、一挙に混沌のなかに吸い込まれるようなことであつて危険だ。
- ウ 様々な悩みを抱える現代人は、人間が生きてゆく上で決して無視することのできない主要な判断軸である男―女の軸を大切にして生きるべきだ。
- エ 男らしさや女らしさといった既成の秩序が揺らいでいる現代人にとって、男女の取りかえを主題とする古典の『とりかへばや』を読むことは有益だ。
- オ 男女の取りかえを主題とする『とりかへばや』は、男女の役割が現在より固定的であつた中世に成立しているため、現代の男―女の軸を固定化する上で参考になる。

問題三 (B) 次の文章をよく読んで、後の問に答えなさい。なお、設問の都合上、一部変更した箇所があります。

昔、唐土に宋氏といふ人ありけり。浜辺を過ぐるに、人の多く集まりて騒ぎあるを怪しみ思ひ、立ち寄りてみるに、漁人ども、一つの大亀を捕らひて苦しめたり。その亀、宋氏を見て涙を流し、しばしば振り返り見るさまなりければ、宋氏は錢一千文を出だしてその亀を買へたり。やがて水中に放ちて亀の命を助けてけり。

その後、年を経て、宋氏、流沙川といふ川に船を浮べて泊りし時に、たちまち怪しき人一人来て、
 「この所の長たる人、君を召し奉るによりて我と共に行き給へ」

と言ふに、宋氏はいづれの長たるも知らざりしが、その人に伴はれて行きてみるに一つの官府あり。役人は出迎ひて共に座し、

「君は我を知るや」

と言ふに、宋氏は絶えて知らぬ人なりき。その人また曰く、

「君は昔、某の浜辺を過ぎし時に、漁人のために大亀の捕らひて苦しめられたるを助けて、放ちたる覚えありや」

と言ふに、宋氏、

「そは覚えたり」

と答ふれば、その司人言ひけらく、

「我が身、すなはちその亀なり。その頃、我、罪ありて、天帝の命を蒙り、流しものにせられて水族となり、漁人のために捕らひられ、君が恵みによりて命助かり、今は、九江の長となることを得たり。今日君をここに召すは、君が子、某、水に溺れて死すべきこと、この名籍に記してあり。この後、日数を経れば、某の山の神、廬山といふ山に出でます時に、御使ひの神の行々に、疾風の風を起し大雨を降らす。君が子、この時に当たりにて死すべし。君が子、早く岸に登り、遠ざかり、隠れ給ふべし。さなくば死を免れじ」

と教ふ。宋氏は、厚く礼儀を述べて、外に出でたりと思ふに、我が船の中に泊りてありけり。

宋氏は、不思議の思ひをなし、船より岸に登り、夢の告げをその子に教へ、その所を遠ざかりければ、その後、日数を経て、大雨・大風吹きて、水に溺れ死したる者多かりき。宋氏が子、あらはにその教へによりて死を免れけり。

〔奇談雜史〕

*官府……官府。役所。

*流しもの……追放刑に処せられた人。流人。

*水族……水中にすむ動物。水生動物。

*九江……中国の地名。

*名籍……名簿。

問一 二重傍線部①「奉」・②「経」の読みを、平仮名で書きなさい(現代仮名遣いでもよい)。

問二 二重傍線部A「やがて」の意味を答えなさい。

問三 二重傍線部B「覚えずして」の本文中での意味を次から選び、記号で答えなさい。

- ア 瞬時のうちに イ 記憶を失つて ウ 知らないうちに エ 意に反して オ 道もわからず

問四 二重傍線部I「ぬ」・II「得」の終止形を、それぞれ答えなさい(平仮名でもよい)。

問五 波線部a s eのうち、「大亀」の正体ではないものを一つ選び、記号で答えなさい。

問六 傍線部1「こ」が指し示す箇所を、本文から三〇字以内で書き抜きなさい。

問七 傍線部2「さなくば死を免れじ」を現代語訳しなさい。

問八 傍線部3「夢の告げ」とあるが、「夢」で語られた内容とその顛末について、本文に合致しているものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「大亀」の化身は、宋氏を洪水から救うために迎えに来た。

イ 「山の神」が廬山に赴く際には、「御使ひの神」が伴をする。

ウ 「大亀」は、無実の罪によって「水族」に姿を変えられた。

エ 皆、避難したので、「大雨・大風」による死者は出なかった。

オ 「大雨・大風」は、「天帝」の怒りによってもたらされた。

問九 傍線部4「その教へ」の内容が述べられている箇所を、本文から二五字以内で書き抜きなさい。

問十 本文の内容を表す言葉として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 貴種流離 イ 異類婚姻 ウ 諸行無常 エ 動物報恩 オ 異界転生

問十一 『奇談雜史』は江戸時代の作品であるが、江戸時代より前に成立した作品を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 『好色一代男』 イ 『曾根崎心中』 ウ 『奥の細道』 エ 『東海道中膝栗毛』 オ 『方丈記』